菅家 洋子（かんけ ようこ）

これまでのこと②

オオマタで「からむし」をはじめる」

高齢のおばあさんが、数年前に手放した「からむし畑」。縁あって来ることになったオオマタで、思いがけず出会った「からむし」に、諦めたはずの気持ちが揺れ動いた。オオマタの「からむし」に関わりたい、という思いが募りながら、それを雇い主の夫に伝えるまでには時間がかかった。当時の夫は「昭和花き研究会」の代表をしていて（2015 年解散）、事務作業や出張で留守にしていることも多かった。後ろめたいような言いにくさもあり、ある日メールでその旨を伝えた。返答はあっさりと「やってください」という簡潔なものだった。そういうところは、今も変わらない。

まず、義母ミヨコさんが、「からむし畑」の持主であるおばあさんと娘さんに連絡をとって、私が「からむし畑」に入り、作業することの了承を得てくれた。義父セイイチさんは、昔家でアサ・カラムシを栽培していた頃に使っていた道具類を出してきて、作業場を整えてくれた。誰も、「かすみ草繁忙期の夏に「からむし」する暇なんてないぞ」と釘をさす人はいなかった。

いよいよ、翌日から「からむし引き」（繊維を取り出す作業）をはじめるという日、畑の持主であるおばあさん、モトコさんに会ってあいさつをしておかなくては思い、娘さんのお宅を訪ねた。「モトコさんが続けてきたからむし、大切に引かせてもらいます」と話すと、「一生懸命やってたら、だんだんうまくなっから」と言葉をもらった。私は、モトコさんに手を触らせてほしいとお願いした。あの畑の「からむし」は、きっとモトコさんの手を待っている。その手のあたたかさが、私の手から、からむしに伝わるように。そして、私の手のなかに、宿ってくれるように。モトコさんは、2017 年に亡くなられた。その後モトコさんの「からむし」の根は、新しく作った畑に移植し、現在も栽培を続けている。

セイイチさんはそのとき、竿に干した「からむし」の繊維に触れながら、「またからむしやっと（やるとは）は思わなかったな」とつぶやいた。菅家家で最後にからむし引きが行われてから、30 年近くが経っていた。満ちていた潮が引いて、そこにあった記憶の跡が、静かに浮かび上がってくる映像が、頭をかすめた。確かに刻まれてきた、歴史の、文化の、人が生きた跡が、ここにはある。その凸凹に触れたような感触と、時の堆積で見えなくなっている記憶が開かれるときに差す光があることを、このときに知った。

セイイチさんは、90 歳になった今も、「からむし引き」を手伝ってくれている。はじめの数年間以降、刈り取りと皮剥ぎを行ってくれて、その後で私が引く。花の仕事の繁忙期の中でからむし作業をするのはやはり簡単ではなく、13 年の間にはほとんど引くことのできなかった年もある。いつも、その時その時、できる形で、出来るように、途切れ途切れでも、続けていく。土器に掘られる文様のように、いとおしく、味わい深い記憶を、この身に、土地に、刻んでいきたい。